

懇談会での意見交換

まちづくりへの展開の可能性（参加者の皆さまの意見）

この懇談会の役割

旧奥州街道には地域資源が多く残っているので、これらを活用し、交流人口の拡大や中心市街地の活性化につなげたい。本懇談会は、様々な人々が集まっているので、こうした方々の自発的な活動がポイントとなる。

中心市街地の活性化に向けては、「何を売り(アピール)とするのか」を明確にする必要がある。

法律の改正を受け、中心市街地活性化基本構想の策定を急がなければならない。そのためにはここ半年ぐらいで関係者及び関係団体による活性化協議会を発足させる必要があり、この懇談会が活性化協議会とつながりをもてるとよい。

まちなかが発揮できる魅力とは？

白河の観光の多くは、白河の3大史跡（小峰城、南湖公園、白河の関）を巡る「バス観光」である。一方、まちなかは案内板・休憩場所・駐車場が不足しているため、うまくPRできていない。

まちなかは「バス観光」とは対照的な「歩いて楽しめるまち」にすることが肝心。

「ひな祭り」を企画運営した経験から、「人に歩いてもらうこと」が大切だと感じた。

来てくれた人をフォローする施設及びボランティアガイドを充実させる。

「おもてなしの心」を目に見える形にする努力が必要。

駐車場から歩いて観光できるまちづくり、また、主な見どころに案内板をつけるなどの改善をすべきである。

現在、病院それぞれが送迎バスを運行している。これに観光的要素を加えてコミュニティバスのような公共交通機関ができるとよい。

ここに住む人が基盤である

古い建物は外から見ればよく見えるが、そこに住む人がいるのを忘れてはいけない。

交流人口を増やすといっても、地元商店との共存が大前提となる。行政が支援するアンテナショップは、安い家賃・税金等の優遇から既存の店舗の脅威になることもあり、慎重に進める必要がある。

住民自身が長続きする地道な活動を行っていくことが大切。

マップづくり

中央商店街振興組合では店舗や商品のアピールを主眼としたマップづくりを進めているので、こうした活動と連携できると良い。

現在、市では観光パンフレットと観光ガイドブックの2本柱にて再編中である。

手軽に持って歩けるものが良い。きれいな写真が撮れる場所、食べ物、歴史的な由来、買い物情報、縁日やイベントが一枚に詰まっているようなまちめぐりマップがほしい。

中心市街地では縁日などのイベントもやっており、市民及び観光客に知らせる役割も持たせたい。

まちなかの魅力は「歩いて楽しめるまち」。

小さな観光。

古い建物をはじめとする魅力的な資源は多いが、住んでいる人がいることを忘れずに進める。

「もてなしの心」を大切に表す。

「まちづくりの方向性」を決める。

中心市街地活性化基本構想の策定にむけ、この懇談会が活性化協議会とつながりを持てると良い。

スライドでまちなか歩きを振り返りました。



歩いて楽しめるまちにするために（参加者の皆さまの意見）

歴史的資源

古い建物の維持・保全に行政の手助けを期待。歴史を感じさせる雰囲気づくりを行いPR。建築協定により建物外観を揃える。

拠点整備

まちなか歩きの拠点となるアンテナショップや情報センター。

休憩施設

白河宿脇本陣柳屋跡をシンボル化。蔵を「飲む、食べる、休む、トイレ休憩」の場所に利用する。休み処をつくる。通り沿いの大きな木の下や店先に、いらなくなったベンチを置くだけの簡単なもの。例)鎌倉「グリーンベンチ」
市民にトイレ（寺の境内・店舗のトイレ等）を開放し、案内板を出す。例)神戸市

案内施設、アピール手法

見どころを案内する看板や説明板を増やす。足元の舗装面であれば邪魔にならず狭い歩道でも設置できる。町ごとに、屋号の看板を道側へ張り出したりして、看板に統一感を持たせる。
JRと連携して観光客を集める。例)神奈川県葉山



懇談会の意見交換の様子

道路、駐車場

まちなかに駐車場を確保し共同利用する。白河石を使った舗装など特色ある歩道の整備を進める。



視点場

景観を阻害するものを除去し、立ち止まれるビューポイントをつくる。

周遊ルート、観光マップ

1枚もののマップ。例) 三春のまちめぐりマップ
観光ツアー誘致のため、小峰城、史跡、白河ラーメンなどを組み合わせてセットメニューと周遊ルートをつくる。白河市観光ウェブサイトに観光情報・マップを載せる。谷津田川沿いで生産されていた寒晒粉かんざらしこを活用し、名産となる和菓子などをつくる。

店舗のグレードアップ

空き店舗のシャッターを上げたり、共同利用を考える。各店舗で特色ある菓子=駄菓子だ菓子を売る。「おもてなしの店」の看板を掲げる。

組織づくり

各町に本町復起会のような動ける組織づくりをめざす。白河通養成講座「街のオヤジに学びたい」を立ち上げる。商店主が講師となり、市民にまちの歴史や商店の自分史を語る。ボランティアのシティガイドとの連携。

できることから
実行してみましょう。